

本的類別を検討した(7)。

これは、該期の深鉢型土器を中心に、I 沈線文系列6類型(a~f)、II隆起線文系列4類型(a~d)という2系列10類型を文様の基準として、類型の検討からその複系的な流れ(第2表)を位置関係を想定したものである(第3図)。

結果的には、加曾利E II式土器以後、称名寺式土器に至るまでに、3段階の推移があることが予察され、この3段階を加曾利E II式土器以後の実際の編年区分に如何に対比させるべきかを問いかけている。

以上のような論展開を基調に、加曾利E IV式土器集成への具体的な作業として、その呼称方法はどうか、微隆起線文を持つタイプ、沈線文を持つタイプ、そして曾利V式類似のタイプというように各々のタイプに分類し、各々のタイプ毎に発生状況や地域的な分布、段階的な変遷をおさえることが必要であるように思える。そして各々のタイプの遺跡における出土のあり方、出土量の多寡等から、各々の中心域一周辺域的な様相を想定し、土器の背景にある領域相互間の人間の交易・交流のあり方や、土器製作をはじめとする生活技術の伝播のあり方の探究へと高揚させていくことが本来的な意義であるように思える。集成はあくまでもその第一歩にすぎない。

#### 4. おわりに

加曾利E IV式土器は、例えば口縁部文様帯が喪失したもの、微隆起線文或いは沈線で区画が成され、磨消縄文の発達したもの等々、各研究者間でイメージ的に想起され得るものはあっても、下総台地においては具体的な資料の集成・整理さえ未だ行われていないと言っても過言ではない現状を憂い、その一つの方向性を提示するために愚見を披露した。言及の不足はひとえに筆者自身の勉強不足の率直な反映であり、多くの方々からの御叱正を請いたい。

註)

- 1) 『神奈川考古第10号』1980.
- 2) 『神奈川考古第11号』1981.
- 3) 樋口昇一・鈴木保彦・能登健「関東・中部・北陸地方」『縄文土器大成②』1981.
- 4) 新山遺跡調査団編『新山遺跡』東久留米市埋蔵文化財報告書第8集1981.
- 5) 『考古学雑誌69-1』1983.
- 6) 成田市教育委員会・中園護台遺跡調査団 成田市遺跡調査報告第一集1973.
- 7) 『奈和第15号』1977.

(6班：東関東事務所)

## 千葉市谷津台貝塚産魚類のデータ追加

小 宮 孟

かつて筆者は、千葉市小仲台町にある谷津台貝塚から出土した魚類遺骸を調査する機会があり、軟骨魚綱1種類、硬骨魚綱21種類の合計22種類の魚を同定したが、なお多くの魚骨が同定未了である(千葉県文化財センター1983)。

魚骨の同定は、正確に種同定が行なわれ、かつ産地の明確な現生標本と対照しながら行なうので、発掘した魚骨が原形や原位置をよく保った状態で出土すれば、同定は比較的容易である。しかし、周知のように遺跡から出土する魚骨は原形や原位置が明確でなく、また発掘作業や水洗作業の途中で欠損するものが多く、魚骨の同定を困難にしている。そこで骨の同定量をふやすためには、コイ

科やブダイ科の咽頭骨のように、種にそなわった特徴が明瞭で、その原位置が失なわれても種同定が可能になる骨を系統的に見つける努力が必要になる。しかし、研究者によって興味をもつ魚種が異なるので、ある研究者Aは、ある魚種aの骨について詳しい情報をもつが、別の研究者Bが詳しい魚種bについては、ほとんど情報をもたないという事態がおりうる。したがって、同定資料の写真を論文もしくは報告書中に掲載するのは勿論であるが、同定の困難な資料についても、可能なかぎり写真もしくは図を提示し、他の研究者の目にふれる機会をつくる必要がある。

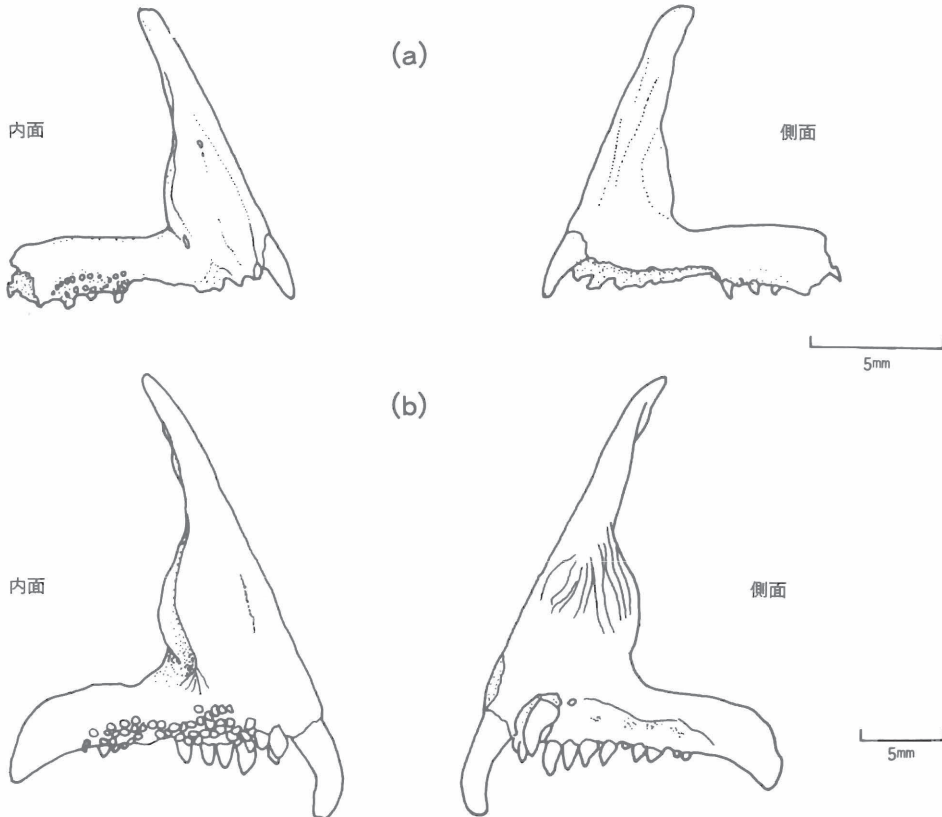
さて、話しを谷津台貝塚に戻そう。既述のよう

に、貝塚のコアサンプルからは筆者には同定困難な多くの魚骨が発見されたが、その中で保存状態がやや良好な左前上顎骨1点を報告書中に図示しておいた(第1図a)。前上顎骨は、魚の食性を反映して、魚種ごとの形態差が比較的明瞭な骨であるので、図示しておけば、同定の手がかりとなる何らかの情報が得られるかもしれないという思惑が働いたからである。この思惑は、昨年(1983年)の11月になって果されることになった。いま柏事務所にいる橋本勝雄さんを通じて東北歴史資料館の岡村道雄さんから、あれはベラの前上顎骨ではないかとのコメントを得たのである。

谷津台貝塚の資料については、ササノハベラ(*Pseudolabrus japonicus* HKC 7808)、イトベラ(*Suezichthys gracilis* HKC 7809)、キュウセン(*Halichoeres poecilopterus* HKC 7814)、ホンベラ(*Halichoeres tenuispinnis* HKC 7816)の4種のベラと比較を行なった結果、これらの標本とは、①上向突起が発達すること。②門歯が発達すること。③前上顎骨の咬合面外側には円錐歯が1列あるこ

と。④その内側には顆粒状の歯が数列並ぶことなどの共通点を見とめていた。しかし、貝塚の資料は④前上顎骨枝後端部を欠損し、この部分の特徴が明らかでないこと。⑤上向突起長は前上顎骨枝長とほぼ等長か、これよりは長くないと推定されること。⑥関節突起の発達が悪く、その分、前上顎骨枝が長くみえること。⑦上向突起と前上顎骨枝のなす角度は70°前後で、上記4種のものよりも明らかに鈍角であることなどの相違点がある。したがって、ベラ科に近縁な魚種と考えられたが、差しあたって同定する目あてがなかったのでベラ科には同定しないでいただいた。橋本さんには、ベラ科については検討しましたと伝え、岡村さんからの攻勢をかわしたつもりであったのである。

ところがである。国立科学博物館の上野輝彌さんを中心とする研究グループが、昭和54年度から遺跡から出土する主な魚の骨のアトラスづくりを進めているが、昨年(1983年)の暮れになって、その中間発表に何げなく目をとおしていると、谷津台貝塚の資料とよく似た標本図が載っているのに気づいた



第1図 谷津台貝塚資料(a)とミツボモチノウオ前上顎骨標本(b)

(千葉県文化財センター 1983, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班 1983より略写)

のである(第1図b)。

この標本はミツバモチノウオ *Cheilinus trilobatus* の前上顎骨で、同図aとは門歯や関節突起の発達程度、上向突起と前上顎枝の長さの比などが異なるとしても、上向突起と前上顎骨枝がつくる角度や前上顎骨枝の長さとの比などが前4種のどの標本よりも谷津台貝塚の資料に近い形態をもっている。ミツバモチノウオは、奄美以南、インド、南西太平洋に分布する暖海性の魚で、分類学的にはペラ科に属す。

谷津台貝塚の発掘を担当した相京邦彦さんと山口直樹さんの話しによると、当センターが発掘をした貝塚部分は、二次堆積層で縄文時代前期の黒浜式土器と江戸時代の土製メッコや最近のガラス片が混在することであった。つまり、採集された魚骨資料の堆積年代については、決定的な決め手を欠いていることになる。したがって、もしこの資料が、現在の東京湾周辺には分布しない暖海性の海魚であれば、それなりに重要な意味もつわけである。

日本沿岸にすむペラ科は現在約130種ほどが知られており、4つの亜科に分類されている。先きに比較を行なった4種のペラは、いずれもカンムリペラ亜科に属し、ミツバモチノウオはモチノウオ亜科に属す。つまり、タイ科でいえば、クロダイとマダイのちがいに相応するちがいがあるわけで、同じペラ科の前上顎骨でも上記の5種の間で既述のような形態差があっても少しもおかしくない。この点は、現生種をつかってもう少し検討する必

要があるが、もし、ペラ科の前上顎骨が亜科レベルで形態差を生じているとすれば、谷津台貝塚の資料は既述した①~④のような特徴にもとづいてペラ科に同定して差し支えがなく、岡村さんの指摘は正しいことになる。

現在の東京湾にもペラ科の魚類は分布しているが、分布の中心は、富津以南の湾口付近の海域で、湾奥部まで侵入するものは多くない。この傾向は縄文時代でも共通していたと考えられ、湾岸の貝塚からのペラ科の出土例は現在までのところ、金子浩昌さんが富津市富士見台貝塚と横浜市称名寺貝塚で同定したものが北限のはずである。谷津台貝塚は、これよりも北の東京湾奥に位置するが、この貝塚からはペラ科のみにとどまらず、ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*、イモガイの加工品、ウルメイワシ *Etrumeus teres* など、東京湾奥にはふだん生息しない外洋性の魚貝類が量的にはわずかではあるが同定されている。したがって、今回の資料は、二次資料とはいえ、これに代わる一次資料が得られるまで貴重な資料といえそうである。

#### 文献

千葉県文化財センター 1983 『谷津台貝塚』84 pp, 20pls

文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班 1983 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学, 630pp

(2班: 千原台事務所)

## 古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間

渡 辺 修 一

「竪穴住居址の発掘においても炉や柱穴と周辺の溝とを出せばそれで発掘終わりという傾向なきにしもあらずだと思うのです。」(田中義昭 註1)

市原市草刈遺跡E区で調査研究員小高春雄と筆者が行なった調査は、いみじくもこの言葉に対する一つの答えを出す結果になった。

1984年度調査した草刈E区は、広大な草刈遺跡のごく一部であるが、住居址約200軒、水田面に向

かって開く鬼高期の環溝などを検出して多くの知見を得た。住居址の調査に臨んで筆者らが最もポイントを置いたのは徹底した床面の精査であったが、その成果は予想以上に大なるものがあつた。当然遺物等は全く未整理の状態にあるが、ここにその成果の重要性を考え若干の考察を加えて報告するものである。

※